

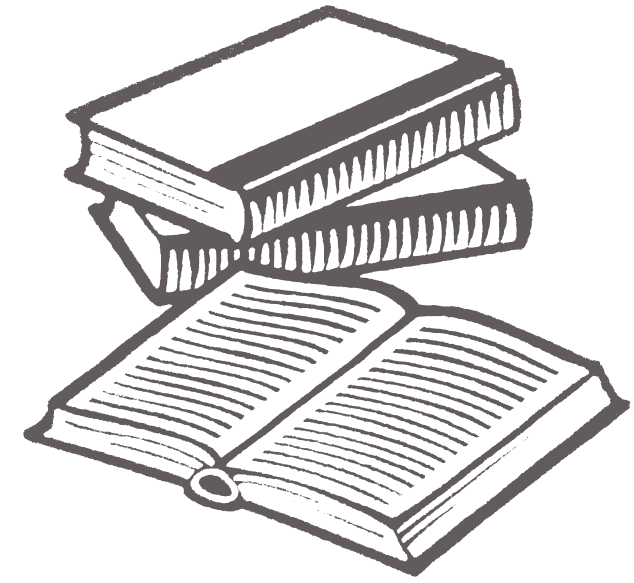
「女性教育」の ゴール

日本とアジア諸国の違い

陳さん（台湾）周さん（中国）
アイリーンさん（マレーシア）
たまさん（ベトナム）



目次



1. なぜ私たちは学ぶのか？
「自立」と「安定」

2. 卒業後の壁：リーダーになれる国、
サポーターになる国

3. 女性は子どもを産み育てやすいのか？
— 各国の育児支援制度

4. 教育を「力」に変えるために：
留学生からのメッセージ





1. なぜ私たちは学ぶのか？「自立」と「安定」



女子学生の大学進学目的に違い

- 日本と私たちの国々：女子学生の大学進学目的に違いが見られる。
- 日本：多くの女子学生にとって、大学進学目的は、安定を求めることと結びついている。
- 私たちの国々：教育は「自立するための武器」である。経済的に自立し、自分の人生を自分で決めるために、真剣に学ぶ。





1. なぜ私たちは学ぶのか？「自立」と「安定」

マレーシア

- 女性が大学で学ぶ目的は「**経済的自立**」と「**社会進出**」に強く根ざしている。
- 共働きが一般的である社会背景から、教育は「いつ何があっても自分と家族を養える力を手に入れるための武器」と捉えられている。
- 特に多民族国家という競争の激しい環境下では、高学歴を得ることは専門職への切符であり、自分の価値を証明して社会的な地位を確立するための不可欠なプロセスである。
- そのため、多くの女子学生にとって大学進学は、単なる安定への道ではなく、プロフェッショナルとして自立し、家族の期待に応えながら、社会のリーダーとして活躍するための戦略的なステップとなっている。





1. なぜ私たちは学ぶのか？「自立」と「安定」

ベトナム

- 特に女性にとって、学ぶ目的は「**自立**」と強く結びついている。
- 教育は、家族や配偶者への依存から抜け出し、結婚やキャリア、そして自分の人生について、自分で決めるための重要な道であると考えられている。
- そのため、多くのベトナム人女子学生にとって、大学進学は、単に安定を求めるためだけではなく、人生の主導権を握り、将来リーダーとしての役割を担うための戦略的な選択でもある。





1. なぜ私たちは学ぶのか？「自立」と「安定」

中国

- 学ぶことは将来の生活の**安定を確保する**ための手段として位置づけられてきた。
- 安定した職業の獲得 → 経済的安定 → 安定した家庭の形成 → 将来の生活基盤の確保
- とりわけ女性にとっては、性別による雇用上の不利やライフイベントによる制約が存在するため、高学歴や安定した職業を得ることが、**生存戦略**として重視されている現状がある。





1. なぜ私たちは学ぶのか？「自立」と「安定」

台湾

- 台湾の女性にとって、学ぶことは単なる「安定」のためではなく、**自分の人生を自分で決めるための「自立」**そのものである。
- 今の時代、本当の意味での「安定」なんてどこにもない。
- だからこそ、教育を通じて自分だけの武器を持つことで、どんな環境の変化があっても自分の足で立ち続けることができる。
- 誰かに頼り切るのではなく、自分で稼ぎ、自分の価値を証明できる力が、結果として一番の安心感につながる。





2. 卒業後の壁：リーダーになれる国？ サポーターになる国？



大学を出た後に待っている「壁」

1. 日本の現実：私たちの国では女性がリーダーなのは「当たり前」ですが、日本では卒業後、目に見えない大きな壁にぶつかる。
2. 数字で見る差：ベトナムやマレーシアと比べると、日本の女性管理職はたった11%。
3. 今日のテーマ：高い教育を受けた女性たちが、結婚や出産を機にキャリアを諦めなくて済むヒントを、他国の事例から探る。



2. 卒業後の壁：リーダーになれる国？ サポーターになる国？



共通点①：高学歴化と、キャリアに直結する「強み」

教育の逆転現象：

これらの国では、女性の大学進学率が男性を上回るのが「当たり前」になっている。

- マレーシア：大学入学率は女性が56%で、男性（37%）を大きく上回る。専門的なスキルを持つ女性層が非常に厚くなっているのが特徴だ。
- ベトナム：女子学生比率が53.7%に達し、教育が「社会的な立場」を築くための不可欠な基盤になっている。
- 中国：女性の大学進学率は63%に達し、10年前より大幅に上昇した。一方で、難関大学に占める女性の割合は依然として低く、理工系では10%未満の大学も少なくない。
- 台湾：25～29歳の女性の81.8%が大学卒。特に大学院への進学率は、ここ10年で女性が50.5%増加し、男性（36.5%）を圧倒している。

圧倒的な専門性があるからこそ、
企業側も「代わりのいないリーダー候補」として期待されるようになる

2. 卒業後の壁：リーダーになれる国？ サポーターになる国？

共通点②：家庭の負担を「外」に出す仕組み



1. 「母親一人」に頼らない文化：日本との最大の違いは、育児の共同化だ。

- 祖父母の全面バックアップ（台湾・ベトナム・中国）：おじいちゃん、おばあちゃんが孫の面倒を見るのが当たり前。これにより、出産後もキャリアを中断する「壁」がなくなる。
- 外部リソースの活用（マレーシア）：安価なナニー（外国人ヘルパー）を雇う文化が浸透。家庭内の負担を外部化することで、仕事に集中できる環境を整えている。

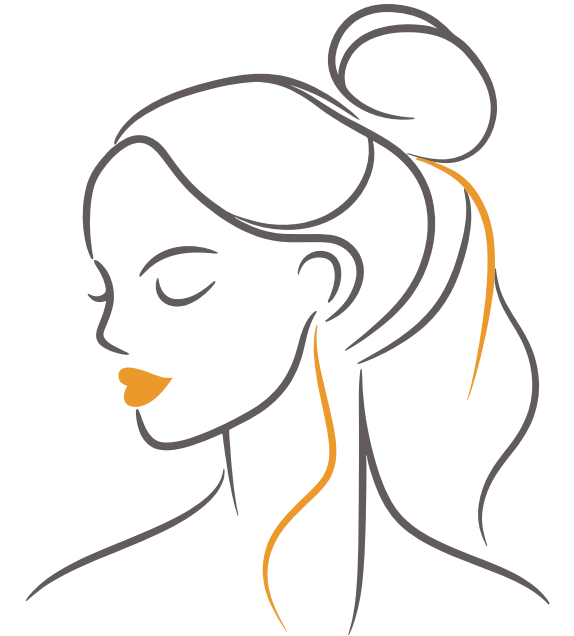
2. 社会の期待値：マレーシアでは「女性が自立して家族を支える」ことが強さの象徴とされ、2030年までに労働参加率60%を目指す国家目標もこれを後押ししている。



2. 卒業後の壁：リーダーになれる国？ サポーターになる国？

国によって異なるリーダーシップの「形」と「壁」

- マレーシア：社会の仕組みから変える「クォータ制」
上場企業の取締役役「30%以上の女性」を義務化するなど、制度としてリーダーへの道を作っている。
- ベトナム：政治・経済の両面で進む女性の登用
女性国会議員は約30%、中堅企業の上級管理職は37.4%に達し、政治とビジネスの両面で主要国を上回るリーダーシップを発揮している。
- 台湾：現場で活躍する女性たち
中小企業の36.4%を女性経営者が占め、特に製造業のリーダーの7割が女性という実力主義の環境下で、売上や利益率が市場平均を上回る高いパフォーマンスを見せている。



「壁」

● 中国：高学歴の裏にある「厚い壁」

1.教育水準は高いが、卒業後は「家庭に入るべき」という古い価値観がまだ強く残っている。

2.女性には教育を受けることが期待される一方で、結婚市場では「賢すぎない女性」が好まれる傾向もみられる。知性と従順さの両方を求める社会的期待は、女性にとって大きな矛盾となっている。

3.就職面接で「結婚・出産の予定」を聞かれるなど、能力とは無関係な部分で不利になる現実がある。

4. 激しい受験競争の中で、女性は「リーダー」よりも「背後で支えるサポーター」を期待されやすい、社会の仕組みそのものに課題がある。





3.女性は子どもを産み育てやすいのか？ — 各国の育児支援制度

経済的支援と休暇制度を中心

国	育児手当	産休制度	男性育休
マレーシア	低所得世帯中心約9,000円/月	98日	7日
ベトナム	なし（出産一時金約28,000円）	6か月	5～7日
中国	約7,100円/月	98日＋30～60日	約10日
台湾	約25,000円/月	8週間	7日

ポイント

- 台湾は継続的な現金給付が最も充実している
- ベトナムは産休期間が最長（6か月）
- マレーシアは低所得層への支援が中心
- 中国は地方政府による追加支援が特徴



3. 女性は子どもを産み育てやすいのか？ — 女性の就業継続をめぐる課題

制度と現実のギャップ

マレーシア

- 産休給与を**企業が全額負担**
- 女性採用への消極姿勢が生じやすい

ベトナム

- 長期産休により職場とのつながりが弱まる
- **昇進機会**を逃す可能性

中国

- 中小企業では**育休取得が困難**な場合がある
- 出産による不利益取扱いが課題

台湾

- 育児負担が**母親**に集中
- 育休利用への**心理的負担**

制度の整備



育休取得



職場復帰



昇進・キャリア形成

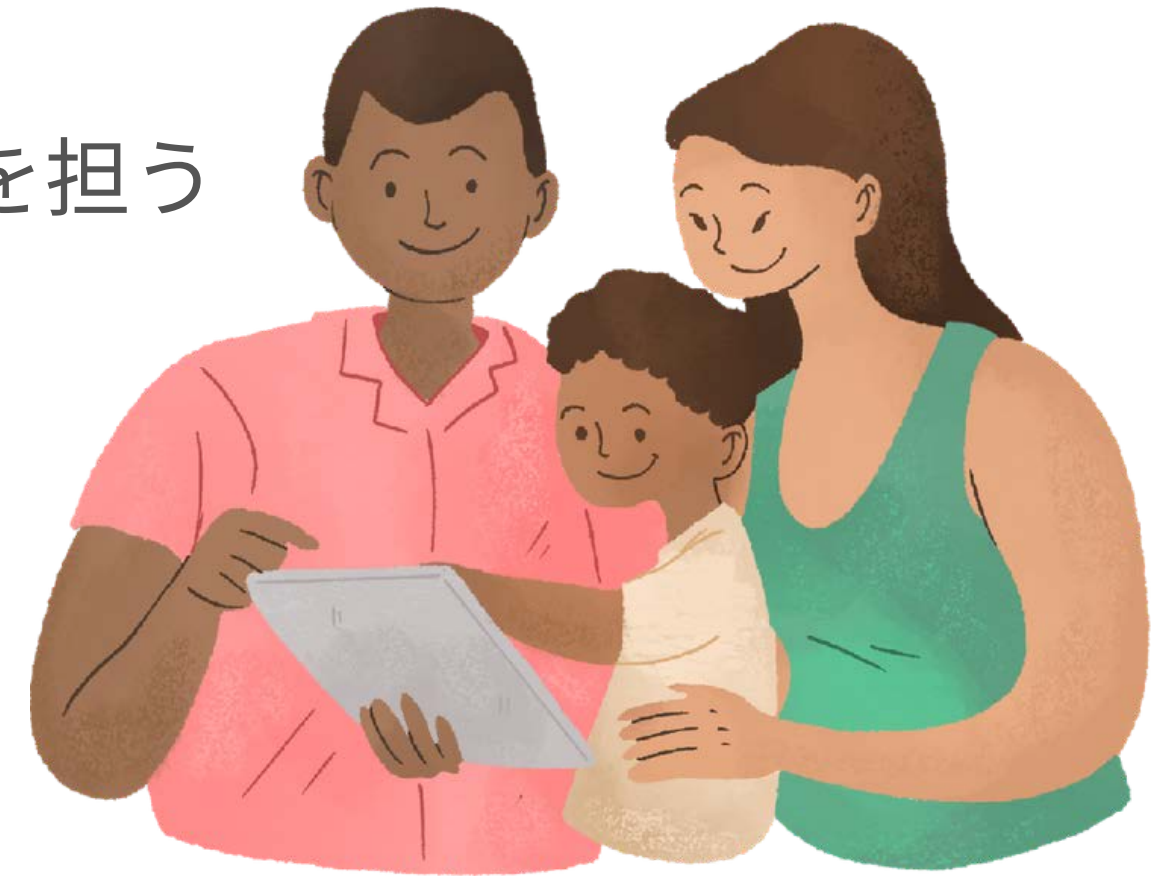
(この過程で様々な障壁が存在)



3. 女性への支援として何が必要か？

—制度だけでは解決できないジェンダー課題—

- ① 家族・親族ネットワークへの依存
 - マレーシア、中国では祖父母による育児支援が重要な役割を担う
 - 公的保育サービスの不足を家族が補完している
- ② 出産・育児によるキャリア格差
 - 産休・育休制度は整備されつつある
 - 復職後の昇進機会や採用面で女性が不利になる場合がある
- ③ 育児責任のジェンダー偏在
 - 育児は母親の役割とみなされる傾向が依然として強い
 - 男性の育児参加は進んでいるものの、主な負担は女性に集中している





4. 教育を「力」に変えるために：留学生からのメッセージ

マレーシア

中国

留学生からのメッセージ

台湾

ベトナム



4. 教育を「力」に変えるために：留学生からのメッセージ

マレーシア

「勉強に費やした時間や努力は、誰かの影になるためでなく、あなた自身が
主役として人生を決めていくためのものだ。

結婚や出産といったライフイベントのために、自分の才能をあきらめない
ください。「誰かを支える役割」だけで終わるのではなく、自分の力を信
じて、堂々と自分の手で未来を切り開いてほしい。心からそう願って
いる。」

アイリーン





4. 教育を「力」に変えるために：留学生からのメッセージ

ベトナム

「私にとって、教育は、ただ学位を取ることや、安定した仕事を見つけるためだけのものではない。教育とは、自分の力で立ち、自分の選択に責任を持ち、環境や他人に頼りすぎずに生きていくための力だと思っている。私は、日本においても、女性の教育が、もっと実際のチャンスやキャリアにつながり、結婚や出産の後も、社会で活躍し続けられる仕組みが広がっていくことを願っている。そうすることで、女性一人ひとりが、自分の力を社会のために生かし続けることができると考えている。」

たまさん





4. 教育を「力」に変えるために：留学生からのメッセージ

中国

「教育は、良い大学に入ることや、安定した仕事を見つけることだけではないと思う。教育によって身につくのは、自分の人生をどう生きるかを、自分で考え、選ぶ力だ。

たとえ、性別の平等が十分に守られていない国であっても、私たちは状況に流されるだけの存在である必要はない。大切なのは、周りの期待や制度に振り回されず、自分が何を望んでいるのかを考え続けることだと思う。

どんな環境に置かれていても、自分の未来を決めるのは自分自身だ。そのためにも、考えることをやめず、選ぶ力を手放さないでいたい。」

周さん





4. 教育を「力」に変えるために：留学生からのメッセージ

台湾

「教育を受けるということは、単なる安定した仕事や暮らしを手に入れるための手段ではない。それは、自分の中に「誰にも奪われない財産」を築き、一生をかけて自分らしさを追求しながら思考を広げていくためのプロセスだ。

たとえ、ジェンダー不平等が残る環境で、現実に妥協せざるを得ない瞬間があったとしても、「自分の人生を自分で決める権利」があることを忘れないでください。これまで積み重ねてきた能力や知識は、必ず自分自身の栄養となり、未来を切り拓く力になると思う。」

陳さん



結論

女子教育のゴールは国ごとに異なると分かりました。自立のための「**武器**」とする国もあれば、生き抜くための「**戦略**」とする国もある。

日本は教育水準が高い一方で、その力がまだ「**安定**」や「**サポート役**」という枠に留まっているのではないだろうか。

教育の真価は、誰かに頼るためではなく、自分の人生を自ら選ぶ取る「**力**」を持つことにある。

「**教育をただの飾りにせず、女性がリーダーとして活躍できる日本を、私たち留学生と共に作りましょう。**」

